広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	藤原頼長の「要書目録」と宋学
Author(s)	渡邊，誠
Citation	アジア社会文化研究 , 25 : 57 - 85
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55236
URL	https://doi.org/10.15027/55236
Right	
Relation	

論説

藤原頼長の「要書目録」と宋学

渡邊　誠

はじめに

平安末期の公卿で内覧・藤氏長者の地位にあった藤原頼長（1120～1156）が学問に熱心で、なかでも特に経書を重んじてその学習過程を日記『台記』に詳しく記したことはよく知られる。詩文・史書の学である文章道（紀伝道）偏重の時代にあって、摂関家嫡流の上流貴族でありながら実践の学として経書を考究した彼の学業は異例であり、特筆に値すると指摘されている[1]。

これまで、藤原頼長の学問に関する研究は、彼が実際に講読した漢籍の学習履歴や日記に引用された漢籍を中心に行われているが[2]、彼の漢籍・漢学に対する関心のあり方を考えるうえで手がかりとなるものに「要書目録」がある。これは、頼長が当時来日していた宋海商に与えた入手を希望する漢籍の目録であり、『宇槐記抄』仁平元（1151）年九月廿四日条に記されている。それによれば、頼長は彼のもとに『東坡先生指掌図』二帖（北宋の税安礼撰『歴代地理指掌図』を蘇軾の撰と誤認か[3]）と北宋の欧陽脩の撰になる『五代史記』十帖（『新五代史』）および『唐書』九帖（『新唐書』）に名籍（自身の名を書き付けた名簿（みょうぶ））を副えて送ってきた劉文冲という宋海商に対して、報賞として砂金30両を与えるとともに「要書目録」を書いて賜い、そのなかで入手できたものがあれば必ず進送するよう仰せ含めた。また、この目録は本来、他の宋人に漢籍を求める目的で故藤原成佐が生前に書いたものであったという。

藤原成佐（1107～1151、正月死去）は藤原頼長が学問の師として尊重した近習の儒士であり[4]、彼がまとめた「要書目録」は厳密には頼長自身の手によるものではないにせよ、頼長とその周囲に集まった講書・講論グループの学問観を反映していると考えられる。

ただし、その目録の内容はまだ十分に検討されているとは言いがたい。『宇

槐記抄』は戦国時代の公卿三条西公条（きんえだ）が永正十四　（1517）年に『台記』を抄録したもので、尊経閣文庫に所蔵され、刊本として『史料大観』とそれを複写した『（増補）史料大成』に翻刻されており、写真版も『尊経閣善本影印集成 66　台記　宇槐記抄・台記抄・宇槐雑抄』（八木書店、2017 年）として刊行されているが、そこに記された「要書目録」の漢籍には書写者・翻刻者の知識不足による誤字も多く、その書名が何であるかすら、正確に認識されているとは言いがたいのが現状である。たとえば、大庭脩氏は『宇槐記抄』記載の書名をほぼそのまま踏襲して「すべて五経と孝経論語」であり「生真面目な儒教経典を希望」したものと紹介するが、それ以上踏み込んだ考察はしておらず[5]、シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア氏も「主要な書目は宋時代より何世紀も前の古典とその注釈書」であると紹介するのみである[6]。しかし、実際には平安時代と並行する中国宋代に著述された漢籍（以下、「宋代漢籍」という）が複数この目録には記されている。

早く、足利衍述氏は「悉く漢魏六朝唐代儒者の著のみなるが、只春秋の中に、「尊王発攸」なる書あり」と指摘し、それを北宋の孫復撰『春秋尊王発微』に比定して、頼長は朱子学の先駆となる学者とその著述を知っていたとし[7]、和島芳男氏も同様に『春秋尊王発微』が含まれることを挙げて、注疏よりも評釈書が多く占めるところに頼長の経学への理解と熱意を読み取っている[8]。また、高田宗平氏も北宋の邢昺（けいへい）撰『論語正義』や陳祥道撰『論語全解』の存在を指摘し、漢唐義疏学の成果と宋学の書とが著録されていると論じた[9]。

この「要書目録」の内容について全体的な検討を行ったのは棚橋光男氏の研究が唯一のものであろう。棚橋氏は『隋書』経籍志・『旧唐書』経籍志・『新唐書』芸文志・『宋史』芸文志と「要書目録」の書目を対校して書名を同定する作業を行ったらしく、その成果と頼長の学風に基づいて、頼長の経学は訓詁の学ではなく義理の解明にあり、儒教的合理主義の体系的・理論的な解明を目指していたとする。そして、政治的実践の学という意味で、頼長は自力で内発的に朱子学＝宋学（性理学）の学問精神を獲得しつつあり、その地平に限りなく肉薄していたと彼の学問の方向性を高く評価した[10]。ただ、惜しむらくは、棚橋氏は校訂結果を示しただけで、そこに記された書目の個々の解説は行っていない。棚橋氏は「要書目録」から〈知の最前線における頼長

の経学に関する独自の探求〉を読み取ったが、解説がないために棚橋氏の言う頼長の探求とはいかなるものか読者には把握できず、またその評価の妥当性も検証しにくい。頼長の学問の評価についても、彼にとって経学が復古主義的政治改革の実用の学として学ばれたことは広く認知されているが、義理の解明や宋学への接近という見方については論者によって認識に濃淡があり、それに否定的な意見も早くからある[11]。

頼長の宋学に対する関心については、彼やその講書・講論グループの一員であった清原頼業が『礼記』中庸篇や『孟子』に注目していた事実をどのように評価するかという議論とも関わり[12]、ひいては平安時代末期における宋学受容の様相を考えるうえでも重要である。

そこで本稿では、あらためて「要書目録」の校訂を行って書名を同定し、そこに記された宋代漢籍を検討して、頼長の関心の在処を探ってみたい。

１.「要書目録」の校訂と内容

本稿では「要書目録」記載の書目の校訂に当たって、棚橋氏が利用した上記の史料のほか、南宋の鄭樵撰『通志』芸文略、南宋の晁公武撰『郡斎読書志』[13]、南宋の陳振孫撰『直斎書録解題』、南宋末元初の馬端臨撰『文献通考』経籍考、および『日本国見在書目録』と『通憲入道蔵書目録』も確認した。なお、『日本国見在書目録』『通憲入道蔵書目録』所収の漢籍はそれぞれ孫猛氏と矢島玄亮氏の詳しい考証がある[14]。あわせて参照されたい。

校訂私案は次頁の通りである。

（凡例）

次頁に示す校訂私案は本来の原文の復元案であり、尊経閣文庫本・増補史料大成本の書名が本来と異なると推測されるものは正しい書名に改め、誤写による衍字や語順の相違と思われるものには削除・入替を施した。ただし、原文に由来すると思われる衍字・語順の相違は一部そのまま残して【 】に注記した。増補史料大成本から改めた字句には（ ）を付し、そのなかに増補史料大成本の文字を記している。＊は棚橋説と私見の異なる書目を示す。※番号は説明を後掲し、尊経閣文庫本『宇槐記抄』を「尊経」、増補史料大成本を「大成」として示す。字体は主として常用漢字を用いる。

周易疏、群臣講易疏、義※1（大）、太玄経、大儀、小畜集、異義、発揮、副象、新注本義、大※2衍玄図、大（行）衍論、義（決）決、外伝、尚書疏、義疏劉（輝）煒、講義、全（令）解、述義、新釈、要略、注釈、注釈問、百問、洪範五行伝、書緯、中候、釈（註）注毛詩、詩※3義音弁、義疏、＊（学）詩名物性門類※4、草木【虫魚】魚虫疏、草木【虫魚】魚虫図（□）、問答、異同（詳）評、表隠、述義、会道、自得、釈義、纂義、詩（諱）緯、＊礼記子本疏、※5＊（問答）答問、外伝名数、外伝義例、（問答）問礼俗、【衍ヵ】天礼論、大儀、義略、正義賈公彦、周義、同（□）図、＊周官（駮）駁難、三礼義宗、三礼大義、江都集礼、五礼名義、古今沿革礼、唐礼、新礼、礼緯、類礼、（註）注春秋序、左伝疏、序論、＊（同異）異同略、例苑、釈滞、区別、義略、春秋（□）図、立義、牒例、（ナシ）申先儒伝例、説要、釈決、述義、左氏膏肓、不尽義、断獄事、弁疑、春秋（湊儀）漢議、＊（駮河）駁何氏漢議（湊義）、＊（郭駮）鄭駁異義、違義、穀梁正義、穀梁廃疾、春秋纂例、春秋異義、春秋微旨、春秋通例、義鑑、何氏春秋釈例、尊王発（攸）微、春秋文苑、春秋繁露、三伝評、（閘）閘外春秋、（ナシ）経社要義、＊春秋（律）緯、孝経疏、（深）援神契、勾命（決）決、越王孝経、内（右年）事、雄（□）図、応瑞（□）図、指※6要、＊（副）制旨、＊孝（誠）経議、＊孝経集（義）議、＊孝経（律）緯、＊名※7賢論語（会解）解、＊論語会、全解、正義、秀義、志明義、述義、＊論語（律）緯、楽緯、＊（阿当）河図、経典大義、五経異義、聖証論、六藝論、※8八経（床）荘子、老（孝）子指（旨諦）帰、瑜伽論疏濮（樣楊）陽大師造

※1　大成「義大玄経」
※2　尊経・大成「大衍、玄図」
※3　大成「詩義、音弁」（尊経は「詩義」と「音弁」の間で改行）
※4　尊経・大成「詩学物性門類草木魚虫疏」、棚橋「詩学、〔名〕物性門類」
※5　尊経・大成・棚橋「礼記子本疏問答」
※6　大成「指要副旨」
※7　棚橋「名賢論語会、解論語会」
※8　棚橋「八経荘子」以下省略

次に、これを整理して示す。「要書目録」の書目は類別に並べて書名の一部を省略しているためそれを補い、あわせて判断の根拠を示す。ただし、唐以前の漢籍で正史に記載のあるものについては、『日本国見在書目録』と『通憲入道蔵書目録』は日本への輸入状況を示すため記載するが、そのほかの正史以外の典拠は特記事項を除いて省略した。また、撰者の伝が正史の列伝に立項されている場合は年代の典拠を省略する。なお、同名異書も多く、「要書目録」の簡略な記述ではいずれとも判断しがたいが、後述するように「要書目録」の作成にあたっては正史を参考にした部分も多いと思われるため、宋代漢籍に該当する書名があっても、唐以前の正史に同名の書がある場合はそちらを指す可能性が高いとみて、宋代漢籍とはみなしていない。典拠略号は次の通り。書名の左の〇は宋代漢籍、※は同定できなかったものを指す。

【典拠略号】

隋：『隋書』経籍志、旧唐：『旧唐書』経籍志、新唐：『新唐書』芸文志、
宋：『宋史』芸文志、通志：『通志』芸文略、郡斎：『郡斎読書志』、
直斎：『直斎書録解題』、通考：『文献通考』経籍考、
見在：『日本国見在書目録』、通憲：『通憲入道蔵書目録』

《易》

周易（注）疏	同時代の〔通憲〕に『周易注疏経』あり。これと同一の書を指すとすれば、王弼（魏）・韓康伯（晋）注、孔穎達（唐）疏のものか。
群臣講易疏	張該等『群臣講易疏』〔新唐〕。〔隋〕では宋明帝集『群臣講易義疏』、〔旧唐〕では張該等注『宋群臣講易疏』。南朝宋。
周易義	宋陳令（南朝宋の陳郡長官）范歆撰『周易義』〔隋〕、盧行超（唐）撰『易義』〔新唐・通志〕、魏徴（唐）撰『周易義』〔通志〕のいずれかか。ほかに宋代にも数種の『易義』があるが、上記の理由から、ここでは一応別物としておく。
太玄経	儒家類に揚雄撰『太玄経』〔宋〕、『揚子太玄経』〔隋・旧唐・新唐〕あり。〔郡斎・通考〕によれば漢の揚雄が易に準じて

作る。〔旧唐〕は撰者を楊雄（『楊雄太玄経』）とする。

周易大儀　梁武帝撰『周易大義』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕は『大義』。〔隋〕に他二種あり。

○小畜集　別集類に北宋の王禹偁撰『小畜集』〔宋・通志・郡斎・直斎・通考〕あり。『周易』の第九卦「小畜」から名付ける。

周易異義　劉遵撰『周易異義』〔見在〕。〔通志〕では『周易異議論』。南朝梁。

周易発揮　王勃撰『周易発揮』〔旧唐・新唐〕。唐。

周易副象　『周易副象』〔見在・通憲〕。〔見在〕によれば萬叔撰注。

周易新注本義　薛仁貴撰『周易新注本義』〔旧唐・新唐〕。唐。

大衍玄図　僧一行撰『大衍玄図』〔新唐〕。唐[15]。

大衍論　僧一行撰『大衍論』〔新唐〕。唐。これとは別に〔旧唐・新唐〕に玄宗撰『周易大衍論』、王弼撰『（周易）大衍論』があるが、前後からこれも僧一行撰が該当と判断。

義決　僧一行撰『義決』〔新唐〕。唐。

周易外伝　高定撰『周易外伝』〔新唐〕。『旧唐書』列伝九十七にも高郢の子定が『易外伝』二十二巻を著すとある。唐。

《尚書》

尚書疏　顧彪撰『尚書疏』〔隋〕。『隋書』列伝四十では『古文尚書疏』。〔見在〕に『尚書疏抄』あり。隋。

尚書義疏 劉焯　劉焯撰『尚書義疏』〔旧唐〕。〔新唐〕は『義疏』。隋。

○（尚書）講義　曾旼（びん）等撰『講義』〔宋〕。北宋。他に〔宋〕には曾肇『書講義』（北宋）、史浩『講義』（南宋）があり、〔直斎・通考〕にも張綱撰『尚書講義』（北宋末）があるが、後述するように曾旼『尚書講義』が当時よく読まれていた状況からみて、その著作とみておきたい。

○尚書全解　胡瑗撰『尚書全解』〔宋〕。北宋。南宋の林之奇（1112～76）の著作にも『尚書全解』があるが、年代が近すぎるため胡瑗撰とみておく。

尚書述義　劉炫撰『尚書述義』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕は『述義』、〔見在〕

は『尚書述議』。隋。

尚書新釈　李顒撰『尚書新釈』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕は『新釈』。李顒は晋の李充の子[16]。

尚書要略　李顒撰『尚書要略』〔旧唐〕。〔新唐〕は『要略』。

※注釈　不明。あるいは衍か。

（尚書）注釈問　〔新唐〕に鄭玄注『古文尚書』九巻、又『注釈問』四巻 王粲問、田瓊・韓益正 とある。後漢。〔隋・旧唐〕では『尚書釈問』。

尚書百問　顧歓撰『尚書百問』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕は『百問』。南斉。

尚書洪範五行伝（論）　劉向撰『尚書洪範五行伝』〔旧唐〕。〔隋〕では『尚書洪範五行伝論』、〔新唐〕では『洪範五行伝論』、〔見在〕では『尚書鴻範五行伝論』。前漢。

（尚）書緯　鄭玄注『書緯』〔旧唐：経緯・新唐：讖緯類〕。〔隋：経緯〕では『尚書緯』。後漢。

尚書中候　鄭玄注『尚書中候』〔隋：雑讖〕。後漢。

《詩》

釈注毛詩　『釈注毛詩』二十巻〔見在〕、『釈注毛詩』四巻〔通憲〕。

※詩義音弁　〔通憲〕に『詩義音弁』五帖 摺本 あり[17]。〔宋・直斎・通考〕に類似の書名『詩古音弁』がみえるが、撰者の鄭庠は南宋の淳熙十四（1187）年に進士及第したというから[18]、これには当たらない。

毛詩義疏　『毛詩義疏』〔見在〕。沈重（南朝梁）撰『毛詩義疏』〔隋〕、張氏撰『毛詩義疏』〔旧唐〕・『義疏』〔新唐〕、その他〔隋・通志〕に複数の『毛詩義疏』あり。

○毛詩名物性門類　『毛詩名物性門類』〔宋〕、『詩物性門類』〔直斎・通考〕。〔直斎・通考〕は北宋の陸佃撰とする。なお、棚橋氏は『詩学』と『物性門類』に分ける。その場合、〔宋〕に南宋の范処義撰『詩学』がみえるが、范処義は南宋の紹興二十四（1154）年に進士というから年代が疑問である[19]。『宇槐記抄』の「詩学物性門類」には空格がなく一つの書目として

扱うため、ここでは「学」を「名」の誤写とみる。

毛詩草木虫魚疏　『毛詩草木虫魚疏』〔隋〕。撰者は三国呉の陸璣（字元恪）、呉から晋の陸機（字士衡）、唐の陸璣の各説があり、三国呉の陸璣説が優勢[20]。書名は『毛詩草木魚虫疏』〔見在〕や『毛詩草木鳥獣魚虫疏』〔旧唐〕、『草木鳥獣魚虫疏』〔新唐〕などともある。

毛詩草木虫魚図　楊嗣復・張次宗撰『毛詩草木虫魚図』、唐の開成年間（836～840 年）〔新唐〕。〔通志〕では『毛詩草木魚虫図』。

問答（毛詩答問）　〔見在〕に『毛詩義疏』十四巻 一巻『問答』とあり。〔隋〕に『毛詩駁』一巻 魏司空王基撰、残欠、梁五巻、又有『毛詩答問』、駁譜、合八巻 とある『毛詩答問』に当たるか。

毛詩異同評　孫毓撰『毛詩異同評』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『異同評』。〔隋〕によれば孫毓は晋の長沙太守。

毛詩表隠　『毛詩表隠』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『表隠』。陳統撰〔隋・新唐〕。晋[21]。

毛詩述義　劉炫撰『毛詩述義』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『述義』、〔見在〕では『毛詩述議』。隋。

※会道　不明。

※自得　不明。

毛詩釈義　謝沈撰『毛詩釈義』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『釈義』。晋。

毛詩纂義　許叔牙撰『毛詩纂義』〔新唐〕。唐。

詩緯　宋均注『詩緯』〔隋：経緯・新唐：讖緯類・見在：異説家〕。〔隋・見在〕によれば宋均は三国魏の博士。また〔旧唐：経緯〕では鄭玄注『詩緯』。後漢。

《礼》

礼記子本疏　『礼記子本疏』〔通憲〕。〔見在〕に皇侃（おうがん）撰『礼記子本義疏』あり。南朝梁。皇侃撰『礼記義疏』〔隋・旧唐・新唐〕に当たるか。

礼答問　〔隋〕に徐広（南朝宋）撰以下複数の『礼答問』あり。そ

のうち何佟之（南朝梁）撰は〔旧唐・新唐〕にもあり、庾蔚之（南朝宋[22]）撰は〔通志〕では『礼問答』、王儉（南朝斉）撰は〔旧唐・新唐〕では『礼儀答問』。

礼記外伝名数
礼記外伝義例
〔群斎・通考〕『礼記外伝』四巻に唐成伯璵撰、『義例』両巻五十篇、『名数』両巻六十九篇とあり。〔通志〕では『礼記外伝名数』。

問礼俗　〔隋〕に董子弘撰『問礼俗』、〔隋・旧唐・新唐〕に董勛撰『問礼俗』あり。董勛は三国魏から晋の議郎[23]。

礼論　〔新唐〕に「何承天礼論三百七巻」とあり、これを『天礼論』と誤認したか。何承天撰『礼論』〔隋・旧唐〕。南朝宋。

礼記大儀　梁武帝撰『礼記大義』〔隋〕、〔旧唐・新唐〕では『礼大義』。

※義略　不明。

礼記正義 賈公彦　賈公彦撰『礼記正義』〔新唐〕。唐。

※周義
※同図
不明。沈重（南朝梁）撰『周官礼義疏』〔隋〕、〔旧唐・新唐・見在〕では『周礼義疏』と『周官礼図』〔隋〕を指すか。また〔見在〕に鄭玄（後漢）・院諶等撰『周礼図』あり。

周官駁難　孫琦問・干宝駁・虞喜撰『周官駁難』〔隋〕。晋。〔旧唐〕では『周官駮難』、〔新唐〕では『答周官駁難』。

三礼義宗　崔霊恩『三礼義宗』〔隋・旧唐・新唐・宋・見在〕。南朝梁。

三礼大義　梁武帝撰『三礼大義』〔見在〕。〔隋〕に『三礼大義』十三巻、『三礼大義』四巻あり。

江都集礼　『江都集礼』〔隋：論語・旧唐・宋：儀注類・見在・通憲〕。〔新唐：儀注類〕では『隋江都集礼』。潘徽等撰〔旧唐・新唐〕。隋。

五礼名義　孫玉汝撰『五礼名義』〔新唐・宋〕。唐[24]。

古今沿革礼　〔見在〕に『古今沿革』、〔通憲〕に『沿革礼』あり。

唐礼　〔見在〕に『唐礼』百五十巻、『唐永徽令』百卅巻、『唐開元令』百五十巻あり。ほか省略。

大唐新礼　房玄齢等撰『大唐新礼』〔旧唐〕。唐。

礼緯　宋均注『礼緯』〔旧唐：経緯・新唐：讖緯・見在：異説家〕。三国魏。〔隋：経緯・見在：異説家〕は鄭玄（後漢）注『礼緯』を載せ、〔隋：経緯〕は「亡」とする。

類礼　陸淳（陸質）撰『類礼』〔新唐〕。唐。なお、〔新唐〕によれば魏徴（唐）撰『次礼記』も『類礼』と言った。

《春秋》

注春秋序　『注春秋序』〔見在〕。

左伝（義）疏　徐文遠撰『左伝義疏』〔新唐〕を指すか。唐。

春秋序論　干宝撰『春秋序論』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『序論』。晋。

春秋左氏伝賈服異同略　孫毓撰『春秋左氏伝賈服異同略』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕は『賈服異同略』。孫毓は上述。晋。

春秋左氏伝例苑　梁簡文帝撰『春秋左氏伝例苑』〔旧唐〕。〔隋〕では『春秋左伝例苑』、〔新唐〕では『左氏伝例苑』。

春秋左氏釈滞　殷興撰『春秋左氏釈滞』〔旧唐〕。〔隋〕では『春秋釈滞』、〔新唐〕では『左氏釈滞』。〔隋〕によれば殷興は晋の尚書左丞。

春秋左氏区別　何始真撰『春秋左氏区別』〔隋・新唐〕。〔旧唐〕では『春秋左氏区分』。〔隋〕によれば何始真は南朝宋の尚書功論郎。

春秋左氏義略　張沖撰『春秋左氏義略』〔旧唐・新唐〕、〔隋〕では陳右軍将軍張沖撰『春秋義略』。または沈文阿撰『春秋義略』〔旧唐〕、〔新唐〕では『義略』、〔通志〕では『春秋左氏経伝義略』。ともに南朝陳。〔通志〕には董敦逸（北宋）撰『春秋義略』もあるが、上記の理由で別物とみる。

春秋図　厳彭祖撰『春秋図』〔旧唐・新唐〕。前漢。または張傑撰『春秋図』〔新唐・宋〕。〔通志・通考〕によれば張傑は唐。

春秋左氏伝立義　崔霊恩撰『春秋左氏伝立義』〔隋〕。〔旧唐〕では『春秋立義』、〔新唐〕では『立義』。南朝梁。

左氏牒例　劉寔撰『左氏牒例』〔新唐〕。三国魏から晋。

春秋申先儒伝例　崔霊恩撰『春秋申先儒伝例』〔旧唐〕。〔新唐〕では『申先儒伝例』、〔隋〕では『春秋申先儒伝論』。南朝梁。以上が十

巻に対して〔通志〕にはこれとは別に『申先儒伝例』一巻あり。

春秋左氏伝説要　糜信撰『春秋左氏伝説要』〔旧唐〕。〔新唐〕では『左氏伝説要』、〔隋〕では三国魏の楽平太守糜信撰『春秋説要』。

※釈決　不明。

春秋左氏伝述義　劉炫撰『春秋左氏伝述義』〔隋〕。〔旧唐・見在〕では『春秋述議』、〔新唐〕では『述議』。隋。

春秋左氏膏肓　何休撰『春秋左氏膏肓』〔隋・旧唐〕。〔新唐・宋・見在・通憲〕は『左氏膏肓』。後漢。

春秋不尽義　蘇徳撰『春秋不尽義』〔見在〕。

春秋断獄事　『春秋断獄事』〔見在〕。前漢の董仲舒撰か[25]。

春秋弁疑　陸淳（陸質）撰『春秋弁疑』〔新唐・宋・見在〕。〔通志〕は『集伝春秋弁疑』、〔通憲〕では『春秋弁議（イ叡）』。唐。

春秋漢議　何休撰『春秋漢議』〔隋・新唐・見在〕。〔旧唐〕では『何氏春秋漢議』。後漢。

駁何氏漢議　鄭玄撰『駁何氏漢議』〔隋・見在〕。〔旧唐〕では『何氏春秋漢議』十一巻 何休撰、鄭玄駁、糜信注。〔新唐〕には『春秋漢議』十巻 糜信注、鄭玄駁 と服虔撰の『駁何氏春秋漢議』がある。後者は〔隋〕の『春秋漢議駁』二巻 服虔撰、亡 か。後漢。

※鄭駁異義　不明。（末尾〔付記〕参照）

春秋公羊違義　劉寔（晋）撰・劉晏（唐）注『公羊違義』〔新唐〕。〔旧唐〕では『春秋公羊違義』。

○春秋穀梁正義　邢昺撰『春秋穀梁正義』。北宋。南宋の鄭樵撰『六経奥論』総文・六経註疏弁に「本朝（北宋）真宗又詔二邢昺一校二一定周礼・儀礼・公羊・穀梁正義一、於レ是九経之義疏始備」とあり、南宋の尤袤（ゆうぼう）の蔵書目録『遂初堂書目』に『春秋穀梁正義』がみえる。

春秋穀梁廃疾　何休撰・鄭玄釈・張靖箋『春秋穀梁廃疾』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『穀梁廃疾』。後漢。

集伝春秋纂例　陸淳（陸質）撰『集伝春秋纂例』〔新唐・宋〕。〔群斎・見在〕

では『春秋纂例』、〔直斎・通考〕では『春秋集伝纂例』。唐。

○春秋異義　王皙（おうせき）撰。北宋。『玉海』巻四十に、「至和中（1054～56）、太常博士王皙撰『春秋通義』十二巻、（中略）又『異義』十二巻、『皇綱論』五巻二十三篇」とある。〔通志〕に『春秋異義解』十二巻 王皙（ママ） あり。

春秋微旨　陸淳（陸質）撰『春秋微旨』〔新唐〕。〔宋〕では『集註春秋微旨』、〔通志〕では『集伝春秋微旨』。唐。

春秋通例　陸希声撰『春秋通例』〔新唐・宋〕。唐。

春秋義鑑　郭翔撰『春秋義鑑』〔新唐・宋〕。

※何氏春秋釈例　不明。〔隋〕に後漢の穎容撰『春秋釈例』（〔新唐〕は『釈例』）、〔隋・宋〕に晋の杜預撰『春秋釈例』（〔新唐〕は『釈例』、〔見在〕では杜預注）があるが、「何氏」とあるため別種とみられる[26]。

○春秋尊王発微　孫復撰『春秋尊皇発微』〔宋〕。北宋。

春秋文苑　『春秋文苑』〔隋・旧唐・見在・通憲〕。〔新唐〕では『文苑』。〔旧唐・新唐〕に沈宏撰とあり、〔通志〕によれば南朝梁。

春秋繁露　董仲舒撰『春秋繁露』〔隋・旧唐・新唐・宋〕。前漢。

春秋三伝評　胡訥撰『春秋三伝評』〔隋・旧唐〕。〔新唐〕では『三伝評』。

閫外春秋　李筌撰『閫外春秋』〔新唐：雑史類・宋：別史類〕。〔直斎：兵書類・通考：兵書〕によれば李筌は唐の少室山布衣。〔見在〕にも春秋家にあり。ただし、内容は殷末から唐初の軍事関係の史実を『左伝』の形式を模倣して記したもので、本来は歴史書ないし兵書に分類されるものであり[27]、『春秋』に関する書物ではない。

○春秋経社要義　孫覚撰『春秋経社要義』〔宋〕。〔郡斎・通考〕は『春秋経社』。北宋。

春秋緯　宋均注『春秋緯』〔隋：経緯・旧唐：経緯・新唐：讖緯類・見在：異説家〕。三国魏。

《孝経》

孝経疏　梁武帝撰〔旧唐〕、元行冲（唐）撰〔旧唐・宋・見在〕（〔新

唐〕では『御注孝経疏』)、賈公彦（唐）撰〔旧唐・新唐〕、蘇彬撰〔宋〕の『孝経疏』のいずれかが該当するか。なお、頼長は保延六（1140）年に『御注孝経』一巻を中原師安から学んでいる[28]。また、〔見在〕の皇侃撰『孝経疏』三巻は『孝経義疏』を指すと思われる。

孝経援神契　宋均注『孝経援神契』〔隋：雑讖・見在：異説家〕。三国魏。

孝経勾命決　宋均注『孝経勾命決』〔隋：雑讖・見在：異説家〕。三国魏。

越王孝経新儀　〔見在〕に『越王孝経』廿巻 希古等撰 とあり、〔旧唐・新唐〕にある任希古（任敬臣、希古は字）撰『越王孝経新義』を指すと考えられる。『宋史』日本国伝によれば、983 年に入宋した日本僧奝然が宋で鄭氏注『孝経』一巻と『越王孝経新義』第十五の一巻を得たといい[29]、越王とは唐太宗の子越王貞のことで、新義は記室参軍任希古等の撰であると記す。唐。

孝経内事　『孝経内事』〔隋：雑讖・見在：異説家〕。

孝経雄図　〔見在：異説家〕に『孝経雄図』・『孝経雌図』・『孝経雄雌図』、〔通憲：大東急本〕に『孝経雄図』があり、〔隋：雑讖・宋：五行類〕に『孝経雌雄図』がある。

孝経応瑞図　『孝経応瑞図』〔旧唐〕。〔新唐〕では『応瑞図』。

孝経指要　李嗣真撰『孝経指要』〔新唐〕。唐。

今上孝経制旨　唐玄宗撰『今上孝経制旨』〔新唐〕。〔通考〕は唐明皇（玄宗）撰『孝経注』をこれに当てる。

孝経議　平貞脊撰『孝経議』〔新唐〕。「巻亡」とある。

孝経集議　荀茂祖撰『孝経集議』〔見在〕、〔隋〕では晋中書郎荀昶[30]撰『集議孝経』。茂祖は荀昶の字[31]。また〔隋〕に晋の東陽太守袁敬仲集『集議孝経』あり。

孝経緯　宋均注『孝経緯』〔旧唐：経緯・新唐：讖緯類〕。〔隋：雑讖〕では宋均注『孝経雑緯』。三国魏。

《論語》

※名賢論語解　不明。ただし、『宇槐記抄』では「名賢論語会解」だが「会」

を衍字とみたうえで、書名ではなく「名賢の『論語解』」の意味と考えれば、宋代に多く書かれた『論語解』の総称の可能性がある。〔宋・郡斎・直斎〕に『論語解』の書名がみえる北宋期の人物のものだけでも、王令、王安石、龔(きょう)原（王安石門人）、蘇軾、楊時、謝良佐、呂大臨、尹焞(いんとん)、游酢（楊時以下は程門）のものがある。

※論語会　不明。

〇論語全解　陳祥道撰『論語全解』。北宋。〔郡斎・通考〕の陳用之『論語』十巻に当たる。用之は陳祥道の字。

〇論語正義　邢昺撰『論語正義』〔通志・郡斎・通考〕。〔宋〕では『正義』北宋。

※秀義　不明。

※志明義　不明。

論語述義　劉炫撰『論語述義』〔隋〕、隋。または戴詵撰『論語述義』〔旧唐〕。〔新唐〕は後者を『述議』とする。

論語緯　宋均注『論語緯』〔旧唐：経緯・新唐：讖緯類〕。三国魏。

《讖緯・経解》

楽緯　宋均注『楽緯』〔隋・旧唐・新唐・見在〕。三国魏。

河図　『河図』〔隋・見在〕。

経典大義　沈文阿撰『経典大義』〔隋：論語・旧唐書・見在：論語家〕。南朝陳。

五経異義　許慎撰『五経異義』〔隋：論語・旧唐・新唐・見在：論語家・通憲〕。後漢。

聖証論　王粛撰『聖証論』〔隋：論語・旧唐・新唐・見在：論語家・通憲〕。三国魏。

六藝論　鄭玄撰『六藝論』〔隋：論語・旧唐・新唐・見在：論語家〕。〔通憲〕は群書類従本『六藝一論』、大東急本『六藝論』。後漢。

《道家・仏家》

※八経荘子　不明[32]。

老子指帰　　厳遵注『老子指帰』〔隋・旧唐・宋〕。〔新唐〕では『指帰』。〔通考〕に漢厳遵君平撰、〔見在〕に漢厳尊(マヽ)撰とあり、前漢。他に〔旧唐・新唐〕に馮廓撰『老子指帰』あり。

瑜伽論疏 濮陽大師造　濮陽大師は唐の高僧智周で、遣唐留学僧の玄昉らが師事して法相宗を学んだとされる[33]。

２.「要書目録」の宋代漢籍

「要書目録」に記された漢籍は全 130 件、その内訳は易類 14 件、尚書類 13 件、詩類 15 件、礼類 21 件、春秋類 38 件、孝経類 12 件、論語類 8 件、讖緯・経解類 6 件、道家・仏家類 3 件である。このうち宋代漢籍と考えられるものは 10 件あり、全体の約 8%となっている。ただし、いずれの時代のいかなる漢籍か不明な書目が 15 件あり、そのなかには「名賢論語解」のように宋代漢籍がまだ含まれている可能性があるが、いまは詳らかにできない。

ここでは、宋代漢籍とみられる書目の内容を確認してみたい。

(1) 小畜集

『小畜集』は『宋史』芸文志では別集類に分類された北宋の王禹偁（954～1001）の詩文集である。それが「要書目録」では易類に混じって記されているのは、書名の「小畜」が易経六十四卦の小畜卦からきているためであろう。王禹偁は咸平三（1000）年末の『小畜集』序に『周易』第九卦「小畜」の「風行二天上一小畜、君子以懿(よくス)二文徳一」を引き、「説者曰、未レ能レ行二其施一、故可レ懿レ文而已、是禹偁位不レ能レ行レ道、文可レ以レ飾レ身也、集曰二小畜一不二其然一乎」（返り点筆者。以下同じ）と述べる。この書名には晩年、左遷という「小(すこ)しく畜(とど)まる」身の上にあって文辞をもって己の道とした彼の心情が込められているのであろう。

王禹偁は技巧を凝らした魏晋南北朝の駢儷体の美文を排してそれ以前の平易な古文の復興を主張した古文家の一人で、制誥を起草する知制誥の地位に三度就き、その間に翰林学士の任にもあった高官として科挙に関わりをもって古文復興を推進し、遠くは漢代に官学とされた六経、近くは唐代の古文家である韓愈を師とすべしとした[34]。また、左遷後には自己の境遇を白居易に重ね、白居易の詩に学んでその表現を自覚的に摂取したことが知られる[35]。

(2) 尚書講義

曾旼（字彦和）の『尚書講義』は現在に伝わらないが、南宋人の著作にしばしば引用されており、特に伝説上の聖王禹が全国を九州に分けて貢賦の制度を定めた地理書「禹貢」について独自の見解を示したことが知られる。『朱子語類』巻七十八・尚書一・綱領には「曾彦和、熙豊後人、解二禹貢一、林少穎・呉才老甚取レ之」とある。これによれば、曾旼は北宋の熙寧・元豊年間（1068～85）より後の人で、その禹貢学は南宋の林之奇（字少穎）や呉棫（字才老）がよくその説を採用したという[36]。

青木洋司氏によれば、呉棫は古文尚書に初めて疑義をとなえた人物として知られており、『尚書』が今文尚書と古文尚書の二つの文体に分かれていることに疑問を持つとともに、漢代以来重視されてきた書序に最も早く疑問を持ち、書序ではなく経文を重視する姿勢を示したという。その『尚書』解釈は南宋・元代に高く評価された。さらに林之奇は書序を孔子ではなく史官の作成とみなすとともに、今文尚書が難解な理由を『尚書』本来の姿ではないためとした[37]。曾旼『尚書講義』は、このような宋学の新たな『尚書』解釈の展開のなかでも一定の評価を得て参照された著作であった。

(3) 尚書全解

『尚書全解』の撰者の胡瑗（胡安定、993～1059）は後述の孫復とその門人の石介とともに「宋初三先生」と並び称され、朱熹によって宋学の祖と位置づけられた周敦頤や程顥・程頤の先駆けをなす儒者とみなされた[38]。その学は、旧来の出世を図る学修や訓詁学的研究に対して、文詞よりも経義を重んじ、己を治め人を治める所以の道を明らかにすることを目指したとされる。詩賦を尚んだ当時において胡瑗は例外的に聖人の体用を明らかにする教育を実践し、湖州に門人数百人を抱えて経義斎・治事斎の道場を置き、経義斎では六経を教本として政治哲学の基本を学ばせ、治事斎では専門的な実務の習得に従事させることで、明体達用の学を目指したという[39]。

(4) 毛詩名物性門類

『直斎書録解題』は『詩物性門類』八巻をあげて陸佃（1042～1102）撰『埤雅』の稿本とする。子の陸宰が記す序によれば[40]、陸佃は『詩経』の動植物に関して多くの知識があった。北宋神宗朝の熙寧年間（1068～78）以後、科挙

において詩賦にかわって経学が重視されるようになると陸佃の毛詩講義も盛んとなった。元豊年間（1078～85）、陸佃は神宗の求めに応じてそれまで試みにまとめてきた動植物の性質に関する未完成の著述のうち説魚・説木の二篇を進上し、さらに加筆訂正を加えて『物性門類』と号した。その後、40 年を費やして『埤雅』二十巻を完成させたという。原田信氏によれば、陸佃は王安石の門人であったが、王安石の『字説』を主とはせず俗説を好んで採用したといい、文献のみに限らず農夫や牧夫、工匠などを広く取材し、風聞には試験を加え、それらによって得た情報を考証に取り入れることを重視したとされる[41]。

(5) 春秋穀梁正義

『宋史』儒林伝によれば、邢昺（932～1010）は北宋の咸平二（999）年に真宗の詔を受けて杜鎬・舒雅・孫奭・李慕清・崔偓佺らとともに『周礼』『儀礼』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』『孝経』『論語』『爾雅』の義疏を校定した。『春秋穀梁正義』はこれに当たると考えられる。その性格については後述の『論語正義』を参照されたい。

(6) 春秋異義

王晳には『春秋通義』十二巻、『春秋異義』十二巻、『春秋皇綱論』五巻があったという。そのうち現存するのは『春秋皇綱論』のみだが、そこから王晳の春秋学の傾向を窺い知ることができる。四庫全書『春秋皇綱論』提要によれば、『春秋通義』は至和年中（1054～56）の撰で三伝注疏および唐代の啖助・趙匡の学説に基づくと『玉海』（巻四十・芸文・春秋）にあり、『春秋皇綱論』も孔子の筆削の主旨と三伝・啖・趙の得失を考査弁正するものとされる。その説は次にみる孫復の『春秋』は貶があって褒はないとする説や三伝を廃する説を破るに足るもので、宋人の春秋解釈のなかにあって古義を失わないものと評価されている。

なお、「要書目録」では『春秋異義』の前後に陸淳（陸質）の『春秋纂例』と『春秋微旨』が配されている。陸淳は啖助の門人で、趙匡は啖助と友人の関係にあり、陸淳の門人には唐代に古文復興運動を起こして新たな思潮をひらいた柳宗元がおり、同じく古文家の韓愈も陸淳らの春秋学の影響を受けたとされる[42]。四庫全書『春秋集伝纂例』提要によれば、陸淳の『春秋（集伝）

纂例』は啖助の死後、その著作に陸淳らが遺文を集録して趙匡に増補削減を依頼してできたもので、啖助の学説は努めて春秋三伝の得失を考え漏欠を弥縫することにあり、そのため多く先儒と異なる論であったという。その三伝を捨てて経文に解釈を求める方法は、異端を排除して正途を開いたと程子が高く評価したように、宋学への道を導いたものとされる。「要書目録」がその啖助・趙匡の説の得失を考察した王皙を撰者とする『春秋異義』を『春秋纂例』の次に配したのは、両書を対となる書とみなしてのことであろう。

(7) 春秋尊王発微

『春秋尊王発微』を著した孫復（992～1057）の春秋学は三伝とその注に惑わされず、曲説によって経を乱すことなく、簡潔に諸侯大夫の功罪を明らかにし、それをもって時の盛衰を考え、王道が乱れを治めるあるべき様を推量したもので、経文の本義を得ることが多いと欧陽脩に評され[43]、宋代春秋学に新たな道を開いたものと評価される。

孫復は孔子が『春秋』に込めた意図を尊王意識にあるとみなし、周王朝の制度が犯されて権威が傷つけられた時にその事実を忠実に記して貶絶するもので、そのために『春秋』には褒辞がないとする。齋木哲郎氏によれば、この徹底した尊王至上の立場は当時の儒教そのものを刺激し、皇帝を絶対とする尊王思想に基づく大義名分論を昂揚させ、流行の緒についたばかりの道学の発展と軌を一にして春秋学の領域を超えた広がりをもたらしたという。また、孫復は夷狄を排斥して支配の綱紀を修復する孔子の意図を『春秋』に見出したが、それは北方の遼（契丹）の圧迫に苦しむ宋の現状に警鐘を鳴らす現在的な意味があり、のちには北宋から南宋への遷都が西周から東周への遷都と重ねられ、現実味を帯びて人々から広範な支持を得たと指摘されている[44]。

(8) 春秋経社要義

『春秋経社要義』の「経社」とは上述の胡瑗の「経義斎」を指し、撰者の孫覚（1028～90）は胡瑗の門人である。『直斎書録解題』によれば、胡瑗は年長の優れた弟子だけを集めて「経社」を結成したが、孫覚は若くしてそのなかに加わり、他の弟子から推服を受けたという。この書はその時に書かれたものであろうとされているように、孫覚が経義斎において胡瑗とその弟子

による春秋学説をまとめたものであろう。

なお、孫覚撰『春秋経解』を分析した齋木哲郎氏によれば、孫覚は胡瑗に師事して春秋学を修めたが、最も影響を受けたのは孫復であり、また唐代の趙匡の影響も大きいとされる。孫覚は孫復の春秋学を継承しつつも、それを修正して『春秋』に毀誉褒貶の両面にわたる機能を見出し、孫復の春秋学を乗り越えて孔子が『春秋』に託した王道政治の理想に近づこうとしたという。孫覚は尊王論の理念を一層徹底させて、尊王思想の絶対性と陽尊陰卑の自然観に基づくことによって、天子に対する臣下の服従義務を自然と人間社会に通底する根源的な原理原則にまで高め、以後の春秋学説の先蹤をなしたと指摘されている[45]。

(9) 論語全解

高橋明郎氏によれば、『論語全解』は陳祥道（字用之、1042～93）晩年の著述で、彼は礼学者としての評判が高く、論語全巻の注釈書である本書はやや畑違いのものであったが、『郡斎読書志』巻四に「其（王安石・王雱（ほう）父子）徒陳用之解、紹聖（1094～98）後、皆行二於場屋一」とあるように、宋代には広く読まれたらしい。その内容は、礼学に長けた陳祥道らしく礼に関する注釈は立派で三礼を引くことが少なくない一方で、それ以外の注釈は従前の注釈法を逸脱して典拠範囲を道家などの諸子に広げ、それまでの経書解釈とは異質とされる。また、陳祥道は王安石の門人としてその説を伝えるとされるが、高橋氏は両者の師承関係に否定的である[46]。

(10) 論語正義

『論語正義』は後代の十三経注疏の一つに数えられるもので、『春秋穀梁正義』と同様に北宋の真宗の詔を受けた邢昺らの撰。南朝梁の皇侃撰『論語義疏』に基づいて煩雑を削って修正を加えたものとされるが、野間文史氏はその原資料として他に隋の劉炫撰『論語述義』や唐の孔穎達等撰『五経正義』など様々な文献のあったことを指摘する。そして、国家的事業として多数の人員を擁して短期間にまとめられたこの種の編纂物は過去の遺産の集大成であり、六朝義疏の学は唐末五代を経て北宋の初めまで綿々と継承されていたとして、『論語正義』をその終着点に位置づけている[47]。

３.「要書目録」の性格

「要書目録」にみえる宋代漢籍には、駢儷文に代わって古文が、詩賦に代わって経学が重視されるようになる科挙とも関わりをもった王禹偁の『小畜集』や陸佃の『毛詩名物性門類』があり、また宋代に広く読まれた陳祥道の『論語全解』や曾旼の『尚書講義』がある。また特に、訓詁学を脱して義理の解明に向かう宋学において先駆的儒者と位置づけられた胡瑗の著作である『尚書全解』やその門人である孫覚の『春秋経社要義』、尊王論によって宋学に多大な影響を与えた孫復の『春秋尊王発微』がある一方、三伝を捨てて経文を重視する春秋学に対して古義を維持したとされる王皙の『春秋異義』があり、また伝統的な義疏の学を集大成した邢昺の『論語正義』『春秋穀梁正義』もみえる。

これらの漢籍は藤原頼長や藤原成佐が生きた時代と並行する南宋初期の中国でもよく知られた書物であったと思われ、当時の中国の学問状況を反映して「要書目録」に記載されたと言うことができそうである。

佐藤仁氏によれば、安史の乱を契機として漢民族の理想の実現やアイデンティティーの確立を目指した古文復興運動が起き、宋代になると契丹（遼）や西夏といった強力な夷狄の攻勢のもとで民族主義・国粋主義の立場が鼓吹されるようになった[48]。その宋では、小島毅氏によれば、初期のアイデンティティーは北方の契丹を強く意識して自らを唐の正当な継承者とするもので、その理想は唐の太宗の時代、貞観の治であったとされる。『宋史』儒林伝が紹介する最初の三人の学者のうち一人目の聶崇義（じょうすうぎ）が著した『新定三礼図』は唐制の復興という国初の需要に応じる実用の書で、後年まで宋の礼制の基本とされた。二人目の邢昺は『五経正義』の拡大版として『孝経』『論語』『爾雅』に疏を付けた責任者として、唐を継承する経学者の代表とされる。それに対して三人目の孫奭（そんせき）は漢唐の儀礼を虚礼として退け、帝王最大の式典であった封禅が北宋の真宗を最後に途絶えたように、彼において唐を模倣しようとする心情との決別が始まるという。そして、宋が唐と同列に並んだという自信から漢唐蔑視の風潮が生まれ、むしろ堯舜および夏殷周三代に模範を求め、帝王のカリスマ統治から官僚機構の統治へ、利から道へと思惟様式が変化するなかで、欧陽脩から以後「宋初三先生」の顕彰が始まるとされている[49]。そ

の頃（慶暦年間〈1041～48〉）から、復古思想を抱き儒教を存立根拠とする古文家が中央に進出して変革を主導したことで、思想運動の新たな潮流が中央の主流となった[50]。「要書目録」の宋代漢籍は、このような変化のただなかの様相を垣間見せている。

ただし、問題は「要書目録」を作成した藤原成佐や藤原頼長の周辺でこれらの宋代漢籍の内容がどの程度認識されていたか、ひいては南宋初期の学問状況が理解されていたのかどうかということであり、彼らはどのような関心をもってこの「要書目録」を作成したのか、ということである。

『春秋異義』が『春秋纂例』と並べて記されていることは、前者が後者と対になるものという認識をうかがわせる。しかし一方で、易の用語を書名とした『小畜集』が易学の書ではないにもかかわらず易類に混じって記されていることは、その内容把握に疑問を抱かせる。『小畜集』については、王禹偁の白居易に学ぶスタイルが平安時代漢詩文と合致して関心をひいた可能性もあるが、そうであれば易類と一緒にはしないであろう。藤原頼長は兄の忠通とは異なって詩賦には非常に淡泊で、経史を特に重んじたことが知られる[51]。

「要書目録」を全体的に観察してみると、何承天『礼論』と思われるものが『天礼論』と記載されていたり、『新唐書』で「巻亡」とされて中国ではすでに散逸していた書物で9世紀末の『日本国見在書目録』にもみえない平貞脊撰『孝経議』が挙げられていたりするように、内容の如何にかかわらず何らかの漢籍の目録を手がかりに書目をピックアップしているのではないかと思わせる趣きがある。棚橋光男氏はその基本となった目録を『隋書』『旧唐書』『新唐書』の経籍志・芸文志とした。また、『日本国見在書目録』所載の書目も多く、そのなかには中国の目録類にはみえないものや、『閫外春秋』のように分類が中国の目録類とは異なり『日本国見在書目録』と一致するものもあることから、『日本国見在書目録』も「要書目録」作成の参考とした可能性が高い。

「要書目録」のこのような性格から考えれば、そこに記された宋代漢籍も、内容を認識したうえで選択されたというよりは、宋海商から聞き知った当時の中国社会で広く読まれていた漢籍を抄録したのではないかと憶測される。全体的には「要書目録」はあくまで漢魏六朝隋唐の注釈書が大半であり、宋

の学術動向にならって訓詁・義疏の学に代わる新たな学問を志向しようとするような意志は感じられない。

当然のことながら、中国の現地に渡ってその地の学術の実態を知ることのできない平安貴族にとって、まだ見ぬ漢籍についての情報を得るには宋海商を媒介とする以外に方法はなく、宋代漢籍に関する知識には自ずと限界があったと言わねばならない。

ただし、「要書目録」130 件中 38 件（29%）と大きな割合を占める春秋類において、義疏の学を集大成した『春秋穀梁正義』や古義を失わなかった王皙の『春秋異議』を挙げる一方で、伝注より経義を重視する宋代春秋学の先駆的著作である『春秋尊王発微』や『春秋経社要義』を挙げていることからすれば、宋代の学術動向の現状がどのようなものであるか知ろうとする姿勢を読み取ることは可能であろう。

藤原頼長が所持・修学した宋代漢籍を『台記』から拾い上げると[52]、保延六（1140）年に彼は北宋の張商英が偽作した『素書』を読み、永治元（1141）年には北宋の欧陽脩撰『新唐書』帝紀と孫奭撰『孟子音義』および范鎮撰『東斎記』（東斎記事）を読んでいる[53]。また、宋代のものではないが唐末の国子博士で唐滅亡後は呉越の古里の烏程で活動した丘光庭撰『兼明書』も読んでおり[54]、これも新旧経学の交叉する時期の経学の書で、旧説を批判し、漢唐注疏学を抜け出して新生面を開拓しようとする傾向をもつとされる[55]。その翌年の康治元（1142）年には侍宗弘から欧陽脩撰『五代史記』（新五代史）の進上を受け[56]、康治二年には北宋の聶崇義撰『新定三礼図』を読んでいる[57]。また、久安元（1145）年にも章衡撰『編年通載』第一の一巻を読んだことがみえ[58]、そのほかに上記の宋海商劉文冲が献じた『東坡先生指掌図』（税安礼撰『歴代地理指掌図』）『五代史記』『唐書』がある。さらには仁平三（1153）年の学問料試の判定に際して、式部大輔藤原永範が頼長のもとに北宋の丁度撰『礼部韻略』を持参したこともみえる[59]。なお、頼長は北宋太宗勅撰の『太平御覧』を講読したともしばしば指摘されるが、頼長の読んだ「御覧」が北斉の武平三（572）年撰『修文殿御覧』であることは夙に小島小五郎氏の詳述するところであり[60]、これは宋代漢籍には該当しない。

頼長は特に保延二（1136）年、十七歳のときから自覚的な漢籍の読書を始

めたことが彼の読書記録から分かるが[61]、宋代漢籍を読み始めるのは 1140 年代に入ってからのようである。彼の学習が本格化するのもこの頃からだが、その前の 1130 年代には 1127 年の北宋の滅亡と南宋への移行という動乱のなかで一時、日宋貿易が停滞していた可能性がある。その期間は日宋貿易に関する史料に乏しく、わずかに長承二（1133）年に宋人周新が鎮西に来航した事例しかない[62]。華北を占領した金と南宋とのあいだに和議が成立するのは第一次が 1138 年、第二次が 1141 年であり、南宋首都臨安（杭州）の整備のための材木を日本に求めたことも手伝って和議成立の頃から日宋貿易が再び活況を呈するようになる[63]。そうしたなかで頼長は宋海商から宋代漢籍を入手し、宋の学問の現況についてもある程度の情報を得たのであろう。

そうであるなら、頼長が『礼記』中庸篇を尊重し、永治元年には『孟子』と『孟子音義』を講読したことについても、やはり宋代の学問状況の知見によるものと考えられる。孟子を孔子の正統な後継者とみなし、堯舜から孔子にいたる道が孟子のあとは正確に継承されなかったとする古文派の道統論が朝廷公認の学説として確定し、文廟に孟子が祭られたのは北宋の元豊七（1084）年のことであった[64]。

「要書目録」においては、春秋類が特に多く、礼類がそれに次いでいる。ここには頼長周辺の関心の在処がよく表れている。実際、よく知られるように頼長は特に春秋学の学習に力を入れて、春秋三伝の本文を校訂し、『春秋正義』と読み合わせて経義を検討するとともに、講論を催して義理究明の論を戦わせるという精励ぶりで、同様な学習を三礼についても行っている[65]。高橋均氏はこのような頼長の関心について、生年が孔子と同じ庚子の日であった頼長が「『春秋』や『礼記』を読む中で、春秋時代末期の混乱に際して、孔子が魯国の秩序の回復を目指していることを知り、そうした孔子の行動に自らの生き方を重ねて、中国の道徳規範を学び取り、自分もまた孔子と同じようにそれを実践することで、この世の混乱を正そうと志した」と指摘している[66]。また、柳川響氏が指摘するように、頼長は経学を通じて摂取した「礼」や「理」「正道」といった価値観を自己の行動規範とし、自らを「君子」と称して憚らなかった[67]。このような姿勢が新たな展開をみせる宋代春秋学の動向にも注意を向けさせたのであろう。

おわりに

宋代漢籍について「要書目録」と同年代の『通憲入道蔵書目録』とを見比べてみると両者には大きな隔たりがある。『通憲入道蔵書目録』については近年、その大部分は通憲が借用した天皇家ゆかりの文庫（宝蔵）の蔵書の目録で、その末尾に通憲没後に没収された彼の蔵書を加えたものとする理解が田島公氏によって示されている[68]。そこには多数の和漢の典籍が記されており、漢籍も経史や雑家、別集など多岐にわたるが、宋代漢籍については矢島玄亮氏が次のものを指摘している（分類は矢島氏による）[69]。

『（新定）三礼図』（礼家）、『広益玉篇』『宋韻』『礼部韻（略）』（以上、小学家）、『蘇子由史記列伝』（正史家）、『王逢蒙求』（雑伝家）、『大観証類本草』（医方家）、『臨川先生詩』（別集家）、『皇宋百家詩』（惣集家）、『（唐）会要』（政治類）、『（夢渓）筆談』（小学・類書類）。このほか、足利衍述氏が『九経要略』と『字説』を挙げている[70]。それぞれ『宋史』芸文志の経解類と小学類に採録されており、後者は王安石撰のものが該当するかと思われるが、前者は『宋史』が初見なものの撰者不明で著述年代は明らかでない。田島氏の指摘に従うなら、これらの宋代漢籍のうち通憲の蔵書は『広益玉篇』『皇宋百家詩』『夢渓筆談』のみで、そのほかは全て天皇家の蔵書ということになる。

儒学に関して、『通憲入道蔵書目録』も唐代以前の漢籍は多く著録されている。それにも関わらず、いまみたように宋代のものは『新定三礼図』と『九経要略』くらいで多くはない。宋の都が貿易港を抱える江南に移ったことで以前に比べて都の文化がダイレクトに日本に伝わりやすい環境にはなったであろう。しかし、頼長が注文したような宋学の著作を受容しようとする動きは当時の日本にはまだ乏しかったようであり、ここに頼長とその周辺の関心の特異性が見出せる。

例えば、「要書目録」にみえる『論語正義』について、阿部隆一氏の明経博士家清原氏の論語注釈における宋学受容の研究を参照すると、『論語正義』は鎌倉時代には日本に入ってきていたが、これが多く用いられだしたのは室町期以降であり、しかもその利用頻度は意外に少なく、あくまで伝統的な何晏注・皇侃疏『論語義疏』が基礎であった。そして、そこに禅宗とともに伝わった『四書輯釈』（元の至正三〈1343〉年刊）に基づく朱注が取り入れられた

ことによって、新旧折衷の学風が成立したとされる[71]。

「要書目録」にみえた宋学への関心は当時においては非常に独特なものであり、それだけに復古主義的改革の理念に燃えた頼長周辺の一部の貴族官人に限られ、その後に継続しなかったのであろう。

本稿は「要書目録」所載の漢籍の内容把握を第一としており、個々の漢籍の考察については、筆者の能力不足のために多くを先行研究に依らざるをえなかった。儒学思想の専門家がみればまた違った理解が得られるかもしれないが、後学に資する基礎的作業として了解されたい。

注

1　小島小五郎「学問」（『公家文化の研究』国書刊行会、1981 年、旧版初出は 1942 年）、橋本義彦『人物叢書 新装版 藤原頼長』（吉川弘文館、1988 年、旧版初出は 1964 年）。

2　前掲注 1 書、岩橋小弥太「悪左府伝」（『國學院雑誌』55-1、1954 年）、和島芳男「経学の復興」（『日本宋学史の研究 増補版』吉川弘文館、1988 年、旧版初出は 1962 年、論文初出は 1959 年）、高橋均「ある中国研究者の早すぎた死　藤原頼長の経書研究を中心として」（倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』森話社、2010 年）、住吉朋彦「藤原頼長の学問と蔵書」（佐藤道生編『名だたる蔵書家、隠れた蔵書家』慶應義塾大学出版会、2010 年）、柳川響『藤原頼長 「悪左府」の学問と言説』（早稲田大学出版部、2018 年）。

3　足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』（復刻版、有明書房、1970 年、旧版初出は 1932 年）19 頁。

4　橋本前掲注 1 著書 41～43 頁。

5　大庭脩「古代中世日本における中国典籍の輸入」（『古代中世における日中関係史の研究』同朋舎出版、1996 年）315～316 頁。

6　シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア『モノが語る日本対外交流史　7―16 世紀』（河内春人訳、藤原書店、2011 年）142 頁。

7　足利前掲注 3 著書 23～24 頁。

8　和島前掲注 2 論文 48 頁。

9　高田宗平「日本古代『論語義疏』受容史初探」（『国立歴史民俗博物館研究報告』163、2011 年）281 頁。

10　棚橋光男「後白河論序説」（『後白河法皇』講談社、1995 年、初出は 1992 年）52～55 頁。

[11] 小島前掲注 1 論文 143 頁では『台記』に義理の探求という見解を支持するものはないとされ、和島前掲注 2 論文 48～49 頁でも「左大臣時代に入るにつれて形式的論議を儀礼的に繰り返す趣きがいちじるしく、もとより訓詁の学から性理の学への発展を追うような傾向は看取すべくもない」とする。

[12] 阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考（下）」（『斯道文庫論集』3、1964 年）47 頁では宋風の影響と推測する。和島芳男氏は頼長が「中庸の特殊性に心づきながら、ついにその思想史上における意義と価値とに想倒しなかった」として頼長を日本宋学史上の先覚者と認めるべきではないとしつつ、宮内庁書陵部蔵清原宣賢自筆『礼記鄭注』巻十六・中庸篇の奥書に清原頼業が「或本」と『礼記正義』を見合わせて中庸篇を「諸経之要道」と評したとあることから、頼長が宋から入手した「或本」によって心づいた可能性を指摘するが（前掲注 2 論文 43～49 頁）、柳川響氏は頼長の中庸への関心について必ずしも否定的にとらえられないとする（柳川「『台記』における漢籍受容の再検討」前掲注 2 著書、38 頁）。

[13] 『郡斎読書志』は孫猛『郡斎読書志校証』（上海古籍出版社、1990 年）による。

[14] 孫猛『日本国見在書目録詳考』上・中・下（上海古籍出版社、2015 年）、矢島玄亮「通憲入道蔵書目録集証」（一）～（五）（『ぐんしょ』10～14、1962～63 年）。

[15] 『宋高僧伝』巻五・唐中嶽嵩陽寺一行伝。

[16] 富永一登「李善伝記考」（『広島大学文学部紀要』56、1996 年）85 頁。

[17] 矢島玄亮「通憲入道蔵書目録集証」（一）（前掲注 14 論文）16 頁では「許義音弁」として内容不明とするが、高橋伸幸氏は「詩義音弁」が正しいとする。高橋「大東急記念文庫蔵通憲入道蔵書目録について（上）―群書類従本との対校―」（『かがみ』10、1965 年）96 頁。

[18] 張民権『宋代古音学与呉棫《詩補音》研究』（商務印書館、2005 年）13 頁。

[19] 『宋元学案補遺』巻四十五。

[20] 『毛詩草木（鳥獣）虫魚疏』については、矢島明希子「陸氏毛詩草木鳥獣虫魚疏の基礎的研究―篇目から見る各本の相違―」（『斯道文庫論集』50、2015 年）。

[21] 陳統については、重野宏一「『四庫全書総目提要』「毛詩正義」訳注」（『筑波中国文化論叢』32、2013 年）207 頁。

[22] 『隋書』巻三三・志二七・経籍一に「喪服儀一巻（中略）喪服三十一巻、宋員外郎散騎庾蔚之撰」とある。

[23] 中村裕一『訳注荊楚歳時記』（汲古書院、2019 年）52・65・238 頁。

[24] 孫玉汝は唐の会昌四（844）年進士及第（『容斎続筆』巻十一）。
[25] 孫猛前掲注 14 著書上 218～219 頁。
[26] 住吉前掲注 2 論文 45 頁。
[27] 氏岡真士「『闇外春秋』と講史」（信州大学『人文科学論集』文化コミュニケーション学科編 35、2001 年）。
[28] 『台記』康治二（1143）年九月廿九日条。橋本前掲注 1 著書 41 頁。
[29] 一般に、鄭氏注『孝経』と『越王孝経新義』は奄然が宋に献上したと解釈されており、拙著『王朝貴族と外交　国際社会のなかの平安日本』（吉川弘文館、2023 年）でもそれを踏襲したが、両書は奄然が宋で入手したと解釈すべきことについて、曹星「奄然研究における諸問題―史料の解読と検証をめぐって」（『朝日大学経営論集』29、2015 年）に詳しい考証がある。また、田中健夫『中世対外関係史』（東京大学出版会、1975 年）21 頁も同様に解釈する。
[30] 中華書局刊『隋書』（1973 年）の校訂によれば、原作「荀勖」を『経典釈文』により「荀昶」に改める。
[31] 『宋書』巻六十・列伝二十・荀伯子伝。
[32] 従来「八経床子、孝子旨蹄」と翻刻されてきた両書が『荘子』『老子』の注釈書とみられることについては住吉前掲注 2 論文 45 頁に指摘がある。
[33] 『三国仏法伝通縁起』中・法相宗。
[34] 東英壽「北宋初期における古文家と行巻―科挙の事前運動より見た古文復興の展開について―」（『日本中国学会報』51、1999 年）。
[35] 澤崎久和「白居易詩における比較表現」「宋詩自注所引の白居易関係資料（一）―王禹偁・宋庠―」（『白居易詩研究』研文出版、2013 年、初出は前者が 1995 年、後者が 2006 年）。白居易の詩との関係については李宇玲氏にご教示いただいた。
[36] 劉起釪『尚書学史（訂補修訂本）』（中華書局、2017 年）234 頁。
[37] 青木洋司「呉棫の『尚書』解釈」「林之奇の『尚書』解釈」（『宋代における『尚書』解釈の基礎的研究』明徳出版社、2014 年、後者の初出は 2012 年）。
[38] 小島毅『宋学の形成と展開』（創文社、1999 年）169～171 頁。
[39] 楠本正継『宋明時代儒学思想の研究』（広池学園出版部、1962 年）21～24 頁、佐藤仁「胡瑗の「明体達用」の学について」（『宋代の春秋学―宋代士大夫の思考世界』研文出版、2007 年、初出は 1999 年）。なお、胡瑗の学問の性格は土田健次郎「胡瑗―程頤の師」（『道学の形成』創文社、2002 年、初出は 1984 年）に詳しい。
[40] 王雲五主編『叢書集成初編　埤雅（一）』商務印書館。

41　原田信「陸佃の『礼象』について―出土彝器収録の意図―」（『中国文学研究』36、2010 年）68～69 頁。
42　齋木哲郎「唐代の儒教と啖助・趙匡・陸淳の春秋学―序説―」（『啖助・趙匡・陸淳を中心とする唐代春秋学の基礎的研究（第一分冊）』科研報告書、代表齋木哲郎、1998 年）7 頁。啖助・趙匡・陸淳三者の春秋学説もこれに詳しい。
43　『欧陽文忠公文集』居士集巻二十七「孫明復先生墓誌銘并序」。
44　齋木哲郎「孫復の春秋学とその尊王思想」（『中国哲学』32、2004 年）。孫復については、佐藤仁「孫復の生涯とその思想―『春秋尊王発微』を中心にして―」（前掲注 39 著書、初出は 2002 年）も参照。
45　齋木哲郎「孫覚の春秋学―北宋新春秋学の一断面―」（『東洋古典学研究』14、2002 年）。
46　高橋明郎「陳承道の「論語全解」に関する一考察」（漢文学会会報『中国文化―研究と教育―』40、1982 年）。
47　野間文史「邢昺『論語正義』について」（『五経正義の研究―その成立と展開』研文出版、1998 年、初出は 1991 年）。
48　佐藤仁前掲注 44 論文 83～85 頁。
49　小島毅前掲注 38 著書 161～179 頁。
50　土田健次郎「慶暦前後に至る思想動向」（前掲注 39 著書）。
51　住吉前掲注 2 論文。
52　小島小五郎前掲注 1 論文 66～81 頁掲載の「頼長修学年表」参照。
53　『台記』康治二（1143）年九月廿九日条。
54　『台記』康治二（1143）年九月廿九日条。
55　馮暁庭「丘光庭《兼明書》経説的意義与価値」（中山大学中国文学系『文与哲』19、2011 年）。
56　『台記』康治元（1142）年五月九日条。
57　『台記』康治二（1143）年九月廿九日条。
58　『台記』久安元（1145）年十二月三十日条。
59　『宇槐記抄』仁平三（1153）年六月廿六日条。
60　小島小五郎「「御覧」考」（前掲注 1 著書）。
61　『台記』康治二（1143）年九月廿九日条。
62　『長秋記』長承二（1133）年八月十三日条。そのほか、長承三年五月二日条にも前筑後守仲能が京都仁和寺境内に設けた蔵に唐物が多く蓄えられていたことがみえるが、それが彼の筑後守時代に得られたものであれば、大治・長承年間（1126～35）には別人が筑後守であることが確認できることから（宮崎康充編『国司補任』第五、続群書類従完成会、1991 年）彼の在任期間は北

宋滅亡以前であるため、1130 年代の貿易の結果ではないと思われる。
63　前掲注 29 拙著 209～211 頁。康治二（1143）年には崇徳上皇が頼長に宋鳩を賜与したり皇太后宮大進藤原政業が頼長に摺本『礼記正義』一部七十巻を貸し送っている。『台記』康治二年三月九日条、七月廿一日条。史料大成本の皇太后宮大進「以業」を「政業」と読むべきことは、橋本義彦「古記録誤写誤読」（『平安貴族』平凡社、1986 年、初出は 1976 年）260～261 頁。
64　小島毅前掲注 38 著書 161 頁。
65　橋本前掲注 1 著書 46 頁、住吉前掲注 2 論文 36～41 頁。また、頼長の学問の内容については柳川前掲注 12 論文にも詳しい。
66　高橋均前掲注 2 論文 284 頁。
67　柳川響「藤原頼長の経学と「君子」観―『台記』を中心として」（前掲注 2 著書、初出は 2013 年）。また、松本昭彦氏は頼長の「君子」の表現を『春秋左氏伝』筆者と同様な立場に自らを置いて出来事を解釈・批評するものとする。松本「貴族日記の中の自画像―台記・中右記を中心に―」（『国語国文』62-10、1993 年）5～7 頁。
68　田島公「天皇家ゆかりの文庫・宝蔵の「目録学的研究」の成果と課題」（『説話文学研究』41、2006 年）115 頁。
69　矢島前掲注 14 論文。
70　足利前掲注 3 著書 18～19 頁。
71　阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考（上）」（『斯道文庫論集』2、1963 年）。

〔付記〕
本稿は佐藤全敏代表科研ミニ・シンポジウム「「国風文化」の再定義にむけて」（2021 年 3 月 27 日、オンライン開催）における口頭報告「日宋貿易と宋代漢籍の受容」にさらに検討を加えて成稿したものである。

本稿脱稿後、榎本淳一「藤原頼長「要書目録」の基礎的研究」（『鴨台史学』19、2023 年）が出た。本稿と同様に「要書目録」の書名の同定を試みたものだが、その内容はまだ試案の段階だった筆者のシンポジウム報告を参照したものであり、かつ、その報告でも紹介していた高田宗平氏などの先行研究の成果が取り入れられていないため、考証が不十分である。

榎本論文から本稿に付け足すべき指摘としては、筆者がシンポジウム報告で「郭駁異議」を「鄭駁異議」かと推測するも確証のなかったものについて、「鄭駁異議」の書名が『春秋左伝注疏』や『春秋公羊伝注疏』の引用に見られることを指摘し（その他にも諸書に見える）、それを鄭玄『駁五経異議』に比定したことがあげられる。